

SS 研 e ポートフォリオ研究 WG 成果報告

-大学教育改革における e ポートフォリオの動向-

小松川浩

千歳科学技術大学 教授

[キーワード]

e ポートフォリオ、e ラーニング、学修成果の可視化、データ活用

1. はじめに

SS 研 e ポートフォリオ研究 WG は、約 2 年間にわたり、e ポートフォリオの事例を収集し、大学教育における e ポートフォリオの概念の検討とシステムに関するトレンド調査を行った¹⁾。さらに、昨今の主体的・自立的な学びを進めるための大学教育改革に照らし合わせて、学部教育を中心とした e ポートフォリオの活用モデルの検討を行った。本講演では、こうした取りまとめ内容に沿って報告を行う。講演後半では、WG のもう一つのテーマである、e ポートフォリオを含む ICT 上のデータを活用に関して、大学教育改革における質保証上重要となる、学修成果の可視化や到達度の明確化の観点から、事例を交えて報告する。なお、一連の成果報告は、担当幹事中西通雄(大阪工大)、推進委員 取り纏め役 中野裕司(熊本大)、推進委員 小松川浩(千歳科技大)、斉藤和郎(札幌学院大)、隅谷孝洋(広島大)、丹羽量久(長崎大)、佐伯敦(富士通)、島田昌紘(富士通)、戸田博人(富士通ラーニングメディア)、毛利隆夫(富士通) の共同作業で制作した。

2. e ポートフォリオ

本 WG では、e ポートフォリオのバランス型の概念をベースに、システム・事例についての取りまとめを行うこととした²⁾。主体的な学習者は、学修コミュニティにおいて学習者間での協調的な学びやチュータなどとの相互作用を通じて、自らの学びを振り返り、自己成長的に学びを深めることになる。この際生じる学修途中での様々な成果を対象に形成的な評価を行うことが肝要で、こうした学修サイクルを実現する「場」がポートフォリオ(ワークスペース)となる。一方で、最終の学習目標に対する成果を学習者自身がエビデンスとして提示することは、高度に自律的な学習者にとって極めて重要な行為である。また、こうした活動は、大学教育においては総括的に評価されるべきであり、それを実現する「場」がポートフォリオ(ショーケース)となる。大学における質保証の観点では、形成的な評価と総括的な評価をルーブリックやチェックリストを用いて一元的に行える「場」を提供するべきで、これも e ポートフォリオに求められる重要な機能といえる。

本 WG では、こうしたポートフォリオの概念を実現するシステムを、e ポートフォリオシステムと定義し、特にオープンソースで利用される(他大学でも導入可能な)内容の整理を行った。多くの大学で導入されている Mahara は、ビュー(ページ)を活用して主にショーケースで利用されることが多い。またオープンソースである Sakai の OSP(Open Source Portfolio) では、マトリクスを用いて表形式でルーブリックや到達度の設定を行えるため、評価を伴うポートフォリオ活用に有効である。また、現在開発が進められ、LT1 を通じたインターオペラビリティに優れる Karuta についても調査を行い、京都大学の梶田先生を通じて情報の収集を図った。詳細は報告書に記載されている¹⁾。

3. 事例の取りまとめ

先般の中教審の答申である高大接続と入試改革では、知識・能力・問題解決力等の新しい学力観に対する学修成果の把握(可視化)とその評価が重要な観点となっており、この点でeポートフォリオの活用が改めて注目されるようになった。大学教育(特に学部教育)課程に沿ったeポートフォリオ活用では、初年次系を中心とした修学ポートフォリオ、就職を意識したキャリアポートフォリオ、教職課程での学修成果を取りまとめる教職ポートフォリオなどと分類できる。創価大学では、全学的に上記一連のeポートフォリオを自主的に開発及び運用を行っており、教育事情に応じた数多くの知見を得ている。千歳科学技術大学では、修学ポートフォリオとキャリアポートフォリオを学部教育で接続させ、ワークスペース的に利用を図っている。札幌学院大学は、学生に対するきめ細かい学修支援を目的とした学生カルテの導入を契機にeポートフォリオ的な運用を試行している。入学前の状況や修学上の学修態度や授業の出席状況などを蓄積し、教員間で情報を共有して、年次進行の学生の情報も引き継ぎながら、学部単位でドロップアウトの未然防止に努めている。長崎大学では、初年次のアクティブラーニングを推進している授業単位でポートフォリオを活用している。予習などの課題の提示や、そこでの自己評価値を簡易的に可視化することで、振り返りの効果を高め、多くの学生を自主的な学修活動に導くことに成功している。広島大学は、主に Mahara を用いたショーケースの機能の活用に力を入れている。特に、研究室での活動における学修成果をポートフォリオに蓄積し、研究指導に活用する取組を実践している。熊本大学は、ワークスペース・ショーケース双方を一元的にシステムで実現している。学部では、修得すべきコンピテンシーを定義しており、これらを科目群と紐付けることで、学部全体でのコンピテンシーの共有を図れる工夫を行っている。また社会人を意識した教授学専攻では、ショーケースを用いた自己評価とエビデンスの提示を図る取組を実施している。

4. データ活用

データ活用については、eポートフォリオのみならず、eラーニングを通じた課外の実践(入学前含む)や、授業支援システムを活用した出席状況・GPA の状況を総合的に活用することが期待される。富士通は、横浜国大との共同研究の成果として、相当数の授業での学習者特性の評価を試行し、学習者特性を表す3つの指標を割り出している。ポートフォリオの解析からは、積極的に振り返りや目標設定を行った学生の学習者特性のプラス要因を確認することができる(長崎大学、千歳科学技術大学)。またeラーニング自体からは、定期的に学習する・学習回数が担保されていることが、理解度に寄与する結果が報告されている(富士通ラーニングメディア)。また反復的にテストに取り組むことで、着実に知識定着に結びつく成果も報告されており(熊本大学)、こうした事例は、今後の高大接続改革の中で実施予定のICTベースの基礎学力テスト対策の有用性を示唆している。このように、eラーニングやeポートフォリオを通じて得られる学修成果(エビデンス)と(新しい)学力観との関係性を継続的に調べることは、授業改善や質の向上等、多くの教育機関にとって有用な知見を与えてくれると考えている。なお、教育機関が連携してデータ活用を行うフェーズについては、各大学の教育事情という点から、まだ一里塚であり、今後個々の教育機関でのデータの活用に基づく事例ベースの検証結果の積み上げ及び共有化が当面は必要な段階と考えている。

以上

[参考]

- (1) 「eポートフォリオ研究WG 成果報告書」SS研 eポートフォリオ研究WG 2015年5月22日
- (2) Helen Barret :Balancing the Two Faces of ePortfolios, Education for a Digital World 2.0, Innovations in Education, vol. 2, Edited by Sandy Hirtz & Kevin Kelly, pp. 291-307 (2012).